

頑仙祠ぐわんせんし 〔一乗寺郷中舞樂寺村辰巳、山上三町許にあり、是石川丈山の寿壙いしかはちやうざんなり、高さ八尺余の自然石にして色青し、

表に碑銘あり、台石三重にして、墓前の石壇三間許、石灯炉二基、巡に大木の松三株あり。此地都て赤土の兀山にして小松少々あり。四隣みな谷深ふして、寿壙はその巔にあり〕

○石川丈山いしかはちやうざんの姓は源氏、諱は重之しげゆき、初の名は嘉右衛門、後に左親衛と改む、一の諱は凹、字は丈山ちやうざんなり。六々山人ろくくさんじんと別称して、世々三州に住す。元和乙卯五月台命を蒙りて、岡山をかやまの御陣に列り、竊に営中を出で不意に敵軍に入甲首二級を

得たり。其後寛永十八年官を辞して、羅山子を友とし、常に詩を咏じ、諸山の名勝を訪ね、台麓じようじの一乗寺を相て嘉遁の地とし、芽を把で屋を構へ、新に詩仙堂しせんどうを営み、誓つて鴨川かもがはを渡らず、こゝに蟄居し、終に寛文十二年五月廿三日卒す。

〔年九十歳、其余は前編に見へたり。○丈山年譜云、正保二年扱地舞樂寺村中山。築寿壙。構祠於山房之巽隅。自号頑仙祠。云々。寛文十二年六月、碑石を建る、序文は繁によつてこゝに略す〕

其銘曰

有器識。居林巒。安義節。

泥蟬冠。懿哉徳。天地寛。柳谷散人埜子苞父識

抑此地は西南晴れて皇城の万戸雲の如く連り、東北を巡る高野鴨川たかのかもがはの流は月を揺し、遠近高低同じからず、常に山頭寂莫として、英名は歳々に深し、寔に満林風雨精霊を護したる、東坡とうばが蜀山しよくざんの古廟ともいひつべし。

舞樂寺天王社〔舞樂寺村山腹にあり、一乗寺八大天王と同神なり、土人生土神とす。諸社根元記云、舞樂寺社八

大天王〔西方末社〕諏訪八幡、いにしへ此所に山門の末院ありて舞樂寺といふ、殊に桜紅葉多くして遊筵の地とす。薩

戒記云、応永卅二年九月舞樂寺一乗寺辺に遊覽す。又二水記云、永正十四年十月將軍一乗寺舞樂寺に遊覽し給ふ〕

金福寺〔舞樂寺天王の下にあり、禪宗南禪寺に屬す。中興は鉄舟和尚なり。本尊は正觀音、慈覺大師の作、長一尺

五寸許〕

芭蕉庵〔同所後の丘にあり。ばせを翁都往來の時、時々こゝに寄宿す、故に芭蕉庵と号す。年久敷頽廢せしを近年再

興す、事は与謝蕪村が撰寫經社集の序に見へたり。又庵の北に芭蕉翁の碑石あり、清田文興これを撰ず。其文曰、

芭蕉翁以諧歌聞於海内諧歌即世所謂俳諧者 翁之履歷人往往詳之蓋伊賀人罷仕隱於 江戸又住江之大津遷於撰而終

翁歿七十余年高士韻人与夫諧歌者流思慕称讚不已 翁所在有之姪道卿新建於東山詩仙堂南金福寺中請予銘焉予義

祖伊藤坦菴先生亦与 翁交坦菴集中有謝 翁邀飲詩亦可以想 翁為人矣今之諧歌要有二端牛鬼蛇神眩耀蒿目打油釘

■脂韋莠口野服葛巾風標如仙而明人所謂那白雲常飛卓■屋上 翁作諧歌清新不俗澹有骨力庶幾詩家陶韋抑又上援杜

陵下伴香山亦或可擬世伝 翁風神散朗侯鯖如茶泓崢之寄杖■千里可謂進于技者矣道卿名敬義予仲氏第二子出嗣樋口

氏為吾藩同宗川越侯源公知京邸事慧而不苛介而能円多諸技芸其於諧歌蓋亦有師受淵源云道卿与 翁生不並世出処異

轍而心醉不已至有斯拳蓋有臭味相契於哀者嗚呼 翁者予義祖所交而道卿尸祝焉予豈漠然銘曰

才瘦貌 ■ 錦心綉腸 行雲流水 十暑三霜 野老争席

桃李門墻 人与骨朽 言与誉長 勒 ■ 此処 建 ■ 多方

維斯名寺 風水允揚 卜隣高士 魂其帰蔵 雖非桑梓

維翁之郷 越国文学播磨清絢撰 平安処士永忠原書

写経社集序云 四明山下の西南、一乗寺村じようじに禪房あり、金福寺こんふくじといふ。土人口称して芭蕉菴ばせをあんと呼。階前より翠微に入

る事二十歩、一塊の丘あり、すなはちばせを庵の遺蹟なりとぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、緑苔や、百年の人の跡をうづむといへども、幽篁なほ一炉の茶煙をふくむがごとし。水行雲とゞまり、樹老鳥睡りてしきりに懷古の情に地す。やうやく長安名利の境を離るゝといへども、ひたぶるに俗塵をいとふとしもあらず、鶏犬の声籬をへだて、樵牧の路門をめぐれり、豆腐売る小家もちかく、酒を沽ふ肆も遠きにあらず。されば詞人吟客の相往来して半日の閑を貪るたよりもよく、飢をふせぐもふけも自在なるべし。抑いつの頃よりさはとなへ来りけるにや、草かる童麦かる女にも、芭蕉菴を問へばかならずかしこを指す、むべ古き名なりけらし。さるを